

## 特別展「ふるさと 大分の洋画家たち」開催に伴う作家・作品等調査

大神 健二

### 1. 本調査の目的

私たちのふるさと大分は、明治初期にフランスに渡った諫山麗吉をはじめ、明治後期から昭和初期にかけて活躍した片多徳郎、戦後、県美術協会を復興させた権藤種男、パリで活躍した佐藤敬、県立芸術短期大学学長を務めた宇治山哲平、自由美術協会等で活躍した糸園和三郎など、数多くの優れた洋画家たちを輩出している。

今回の調査では、明治から平成にかけて活躍した大分出身・ゆかりの洋画家たちを改めて調査し直すとともに、その成果を特別展「ふるさと 大分の洋画家たち」として観覧者に紹介することを目的として行ったものである。

中央公募展における実績や地元における洋画普及に大きく寄与した画家たちを調査した結果、諫山麗吉(1851～1906)から、約 100 年にわたる大分出身・ゆかりの洋画家たちの画業の足跡を大分市美術館・大分県立美術館・別府市美術館・個人が所蔵する秀作により紹介することとした。

### 2. 作家調査

文展（後の日展）、国展、独立展、自由美術展、行動展、二紀展等の中央公募展における受賞歴や、地元における洋画普及に尽力した画家を中心に調査し、詳細は別紙 1 に整理した。調査した作家は計 61 名である。

### 3. 作品調査

詳細は別紙 2 に特別展「ふるさと 大分の洋画家たち」出品目録として整理した。調査した作品は、洋画 74 点である。

### 4. 会場風景

展覧会場を撮影したものを別紙 3 に整理した。

### 5. 解説パネル

展覧会を第 1 章から第 8 章で構成し、各時代における大分の洋画家たちの動向が分かるよう詳細を別紙 4 に整理した。

### 6. 関連年表

1869 年に川上冬崖が「聴香読画館」を開いてから、1994 年に利光敏郎が第 70 回記念白日会に初入选するまでの関連年表を調査し、詳細を別紙 5 に「ふるさと 大分の洋画家たち 関連年譜」として整理した。

### 7. 参考文献

※今回の展覧会を開催するにあたり下記文献等を参考とした。

大分県芸術文化振興会議「第 4 回大分県芸術祭 大分県美術百年展作品集」1968 年 10 月発行

狭間久「大分県文化百年史」大分合同新聞 1969 年 2 月 15 日発行  
大分県画人名鑑刊行会「大分県画人名鑑」 1978 年 10 月 22 日発行  
講談社「近代日本美術事典」1989 年 9 月 28 日発行  
思文閣出版「大分の美術」1994 年 2 月 26 日発行  
後藤龍二「大分の近代美術 明治・大正・昭和」1992 年 10 月 30 日発行  
後藤龍二「大分県近代美術史年表—明治・大正・昭和（～20 年）—」1996 年 11 月 18 日発行  
大分県立芸術会館所蔵作品選図録 1997 年 6 月 3 日発行  
大分県立芸術会館「' 80 大分県美術総合選抜展」1980 年 1 月発行  
大分県立芸術会館「' 81 大分県美術総合選抜展」1981 年 1 月発行  
大分県立芸術会館「' 82 大分県美術総合選抜展」1982 年 1 月発行  
山崎芳直・菅久「大分銀行本店ロビー展美術時評集」1995 年 1 月 30 日発行  
菅久・十時良「大分銀行本店ロビー展美術時評集Ⅱ」2010 年 6 月 30 日発行  
大分県美術協会 20 周年記念誌「美を拓く大分」1984 年発行  
大分県美術協会 40 周年記念誌「大分県美術協会 40 年のあゆみ」2005 年 3 月 31 日発行  
大分県美術協会 50 周年記念誌「大分県美術協会 50 年のあゆみ」2015 年 3 月 25 日発行

諫山麗吉（いさやまれいきち）

【1851(嘉永 4)年～1906(明治 39)年】

中津市生まれ。雅号、扇城。1875(明治 8)年、上京して国沢新九郎の画塾「彰枝堂」に入門。1877年、第 1 回内国勸業博覧会に《王子割烹店ノ図》を出品し、褒状を受賞。1880 年頃、清国に渡り、数年間上海に滞留した後、ロンドンを経て、1892 年頃、パリに至る。パリでは、肖像画を描いたり、日本画手法による花鳥画を手掛けたようである。1900 年、渡仏した浅井忠とパリで再会。1906 年、同地にて客死した。

藤米岳（ふじべいがく）

【1853(嘉永 6)～1916(大正 5)年】

臼杵市生まれ。帆足杏雨に師事。名は雅三、号は米岳。1876(明治 9)年上京し、国沢新九郎の画塾「彰枝堂」に入門後、工部美術学校で学ぶ。1883 年、同校廃校に伴い、工部省に出仕し官吏となる。1885 年、官命によりフランスに留学。その後、黒田清輝や久米桂一郎らとともにラファエル・コランに師事。1888 年のサロンに《破れたズボン》を出品し入選。同地でフランス人女性と結婚後、ニューヨークに渡り、一度も帰国せずに逝去した。

片多徳郎（かたたとくろう）

【1889(明治 22)年～1934(昭和 9)年】

豊後高田市生まれ。1912(大正元)年、東京美術学校本科卒。1909 年、第 3 回文展に《夜の自画像》を出品し初入選。1917(大正 6)年・1918 年と連続して文展で特選。翌年、第 1 回帝展に《霹靂》を出品し推薦。1922 年、33 歳の若さで帝展審査員となる。若くして名声を博したが、晩年はアルコール依存症に苦しんだ。県洋画団の長老、指導者といわれた人は、様々なかたちで影響を受けたといわれている。

権藤種男（ごんどうたねお）

【1891(明治 24)年～1954(昭和 29)年】

大分市生まれ。大分中学で、松本古村の指導を受ける。1912(明治 45)年、東京美術学校師範科卒。在学中、同郷の片多徳郎と親交を結ぶ。1917(大正 6)年、第 11 回文展で《驟雨の後》を出品し初入選。以後、文展、帝展、新文展を中心に活躍。戦後に帰郷。1946(昭和 21)年、大分県美術協会の結成にともない、初代会長に就任。郷土の美術の発展と、後進の育成に努めた。

菅一郎（かんいちろう）

【1894(明治 27)年～1975(昭和 50)年】

佐伯市生まれ。1912(明治 45)年、大分中学を卒業後、上京。1919(大正 8)年、同郷の先輩、岡角太郎の家に寄宿しながら川端画学校で学ぶ。この頃、片多徳郎の知遇を得る。1921 年、第 3 回帝展に《婦人像》を初出品し特選受賞。その後、同展を主舞台に活躍。1937(昭和 12)年、新文展の発足に伴い無鑑査となった。1926 年から 1942(昭和 17)年まで佐伯中学で教壇に立ち、後進の育成に努めた。

保田善作（やすだぜんさく）

【1897(明治 30)年～1992(平成 4)年】

佐伯市生まれ。1911(明治 44)年、宮崎県立尋常高等小学校高等科卒。1924(大正 13)年、第 5 回帝展に《娘の肖像》を出品し初入選。1930(昭和 5)年、聖徳太子奉讃美術展に《杜》を出品。翌年、第 12 回帝展に《魚市場》を出品後、帝展・新文展等に度々入選を果たした。その一方で、春台美術展や第一美術協会展等にも精力的に出品。戦後は、日展委員等も務めた。

江藤純平（えとうじゅんぺい）

【1898(明治 31)年～1987(昭和 62)年】

臼杵市生まれ。1916(大正 5)年、臼杵中学校を卒業後、同郷の彫刻家日名子実三を頼り上京。本郷洋画研究所に入り、岡田三郎助に師事。1923 年、東京美術学校卒。1924 年、第 5 回帝展に《アトリエにて》を出品し初入選。1928(昭和 3)年、1929 年、1933 年の帝展で特選。その後、帝展・新文展・日展等を主舞台に活躍。1975 年、日展参与。1978 年、紺綬褒章受章。翌年、光風会名誉会員となった。

佐藤敬（さとうけい）

【1906(明治 39)年～1978(昭和 53)年】

大分市生まれ。1931(昭和 6)年、東京美術学校卒。1929 年、第 10 回帝展に《若き男の像》を出品し初入選。1931 年から 1934 年まで渡仏。1931 年、サロン・ドートンヌに《首巻をせる婦人》を出品し初入選。翌年、第 13 回帝展に《レ・クルン》を出品し特選。1936 年、猪熊弦一郎らと新制作派協会を設立。1952 年、再渡仏。初期は、マチスやピカソの影響を受けた作品を制作。晩年は、《古墳》等をテーマに独自の抽象絵画を描いた。

山下鉄之輔（やましたてつのすけ）

【1887(明治 20)年～1969(昭和 44)年】

福岡県生まれ。東京美術学校卒。岸田劉生らと交遊を深め、1912(明治 45)年、フェウザン会の結成に参加。武者小路実篤らの「白樺」同人として人道主義や西洋芸術を推進するとともに帝劇の舞台美術も手掛けた。1916(大正 5)年、片多徳郎の紹介で大分中学に赴任。宮崎豊、佐藤敬、高山辰雄らを指導。1926 年、同中学を退職後、大分県女子師範学校、大分商業学校等で教壇に立ち後進の育成に努めた。

武藤完一（むとうかんいち）

【1892(明治 25)年～1982(昭和 57)年】

岐阜県生まれ。川端画学校で学ぶ。1923(大正 12)年、文部省中学校教員検定試験に合格し、1925 年、首藤雨郊の後任として大分県師範学校図画教師となる。1938(昭和 13)年、日本版画協会会員。1950 年、大分大学教授。1953 年以降、光風会展を主舞台に活躍。1961 年、大分県立芸術短期大学教授となった。1964 年、光風会会員。大分県下における版画の普及に尽力した。1969 年、勲四等瑞宝章受章。

浜田九一郎（はまだくいちろう）

【1909(明治 42)年～1993(平成 5)年】

長崎県生まれ。1934(昭和 9)年、東京美術学校師範科卒。同年、満州国新京中学校教諭となる。1943年、大分師範学校女子部教授・大分師範学校助教授となる。1965年、大分大学学芸学部教授。1981年から2期4年、大分県美術協会第4代会長を務めた。1985年、文化庁地域文化功労者文部大臣表彰を受賞。郷土の美術の発展と、後進の育成に尽力した。

田中昇（たなかのぼる）

【1915(大正 4)年～1991(平成 3)年】

熊本市生まれ。1937(昭和 12)年、東京美術学校師範科卒。同年、大分県女子師範学校兼大分県立第二高等女学校教諭。1938年から終戦まで兵役に就く。戦後、権藤種男らとともに大分県美術協会を再興。県立上野丘高等学校、県立緑丘高等学校で教壇に立つとともに、県高等学校美術科指導監を務めた。県美展を中心に活躍し、多くの後進の育成に努めた。

宮崎豊（みやざきゆたか）

【1903(明治 36)年～1991(平成 3)年】

由布市生まれ。1927(昭和 2)年、東京美術学校師範科卒。1936年、新文展に初入選。1939年、帰郷し、大分中学校に勤務。1940年、初個展を一丸百貨店で開催。1953年から1956年まで、大分県立別府緑丘高校の校長を務めた。1963年、一水会展に初入選。以後、9回入選を果たす。1967年、大分県美術協会第2代会長となる。1975年、勲四等瑞宝章受章。郷土の美術の発展と後進の育成に努めた。

進来哲（すすきてつ）

【1905(明治 38)年～1981(昭和 56)年】

臼杵市生まれ。1930(昭和 5)年、東京美術学校卒。同校で、藤島武二に師事。1927年、第14回光風会展、第8回帝展に初入選。以後、光風会展、新文展、日展等を中心に活躍。1961年、大分県立芸術短期大学教授となる。1977年から2期4年、大分県美術協会第3代会長を務めた。1980年、日展会友。同年、大分合同新聞文化賞受賞。郷土の美術の発展と、後進の育成に尽力した。

仲町謙吉（なかまちけんきち）

【1920(大正 9)年～2010(平成 22)年】

臼杵市生まれ。1943(昭和 18)年、東京美術学校師範科卒。同年、第6回新文展に《深田石仏》を出品し初入選。その後、日展、光風会展、県美展を主舞台に活躍。1950年、大分大学教授。1984年、同大名誉教授。1985年、大分県美術協会第5代会長(2期4年)。その後、大分県芸術文化振興会議理事長。1994(平成 6)年、勲三等旭日中綬章受章。郷土の美術の発展と後進の育成に尽力した。

脇正人（わきまさと）

【1926(大正 15)年～】

大分市生まれ。1947(昭和 22)年、大分師範学校卒。1954 年、第 18 回自由美術協会展に《かぶ》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1966 年、自由美術協会会員。1986 年、自由美術平和賞、1989(平成元)年、自由美術賞受賞。1991 年、大分県美術協会第 6 代会長(5 期 10 年)となる。2001 年、大分県芸術文化振興会議会長。県下では、大分前衛美術会、七人の会、潮流の会等に出品。画面に黒線を刻み込む独特の抽象画は、国内でも高い評価を得ている。

脇坂秀樹（わきさかひでき）

【1930(昭和 5)年～】

杵築市生まれ。1954(昭和 29)年、大分大学学芸学部卒。同年、第 40 回光風会展に《黒衣像》を出品し初入選。1959 年、第 25 回東光会展に《灼土の丘》《風景》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1964 年、東光会会員。2001(平成 13)年、大分県美術協会第 7 代会長(2 期 4 年)。郷土の美術の発展と、後進の育成に尽力するとともに、変わり行く大分の街並みを抒情豊かな色彩と重厚なマチエールで描き続ける。

渡辺恭英（わたなべきょうえい）

【1936(昭和 11)年～】

豊後大野市生まれ。1960(昭和 35)年、大分大学学芸学部卒。1963 年の大潮展以降、新象作家協会展、二科展、新制作協会展等の全国公募展に積極的に挑戦を続け、数多くの賞を受賞。1994(平成 6)年、大分大学教育学部教授。2000 年、朝倉文夫記念館館長(2005 年 3 月まで)。2005 年、大分県美術協会第 8 代会長(2 期 4 年)。2010 年、大分県芸術文化振興会議理事長。生涯を通じて“紙襷”による表現を追求し続けている。

小川善規（おがわよしのり）

【1941(昭和 16)年～】

大分市生まれ。1963(昭和 38)年、大分大学学芸学部卒。1959 年、第 24 回大分県美術展に《工場》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活動を展開。1962 年、県教育長賞、1983 年、2007 年、県美術協会賞を受賞。一方、1961 年から 1970 年までグループ 0 展に出品し研鑽を続けた。1962 年、第 28 回東光会展に初入選。1983 年、個展(大分銀行本店ロビー)。2013 年、大分県美術協会第 10 代会長(2 期 4 年)。郷土の美術の発展と後進の育成に努めた。

日名子金一郎（ひなごきんいちろう）

【1943(昭和 18)年～】

大分市生まれ。1966(昭和 41)年、大分大学学芸学部卒。1962 年、第 30 回記念大分県美術展に初入選。1965 年の県美術展で文部大臣賞。1967 年、第 31 回自由美術協会展に《廃船Ⅲ》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1970 年、自由美術協会会員。2009(平成 21)年、第 73 回自由美術協会展で平和賞を受賞。2017 年、大分県美術協会第 11 代会長となる。線による水面の表現を追求し続けている。

荒井龍男（あらいたつお）

【1904(明治 37)年～1955(昭和 30)年】

中津市生まれ。家族と共に朝鮮に渡り、朝鮮総督府の官吏となる。二科展や朝鮮美術展に入選したのを期に職を辞し、30 歳で渡仏。同地で、オシップ・ザッキンと親交をもつ。1937(昭和 12)年、自由美術協会の結成に参加。1950 年、山口薫らとモダンアート協会を設立。1952 年から 1955 年にかけて、ニューヨーク、パリ、サンパウロ等で個展を開催し、好評を博す。将来を大いに嘱望されたが、病を患い急逝した。

吉村益信（よしむらますのぶ）

【1932(昭和 7)年～2011（平成 23）年】

大分市生まれ。高校時代、「新世紀群」に参加。1955(昭和 30)年、武蔵野美術学校卒。1960 年、篠原有司男らと「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」を結成。反芸術的なオブジェを発表する等注目を集めた。1962 年、渡米。1966 年、帰国後、ネオン管を用いたライトアートと発注芸術を展開。1970 年、万国博に参加。60 年代から 70 年代を代表する日本の現代美術家として、今なお高い評価を得ている。

風倉匠（かざくらしょう）

【1936(昭和 11)年～2007(平成 19)年】

大分市生まれ。本名、橋本正一。武蔵野美術学校中退。1960(昭和 35)年、「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」の結成に参加。その後、国内外で様々なパフォーマンスを行う。当時、写真や映像等の記録を残させなかったため、伝説のパフォーマーと呼ばれた。1986 年、パリのポンピドー・センター、1992(平成 4)年、「巨大都市の原生東京ー大阪行為芸術 1992 年ヨーロッパツアー」等に参加。日本を代表するパフォーマーとして、現在も高く評価されている。

江藤哲（えとうてつ）

【1909(明治42)年～1991(平成3)年】

国東市生まれ。1931(昭和6)年、東京高等工芸学校卒。通産省特許庁に勤務する傍ら、熊岡美彦主宰の洋画研究所で学ぶ。1933年、第14回帝展に《人物》を出品し初入選。以後、帝展・新文展・日展で活躍。1947年、第3回日展で特選受賞。1965年、日展会員。その後、日展審査員、評議員、参与等を歴任。1970年、名古屋芸術大学教授となった。1979年、勲三等瑞宝章受章。1980年、第12回改組日展で内閣総理大臣賞を受賞した。

宇治山哲平（うじやまてつぺい）

【1910(明治43)年～1985(昭和60)年】

日田市生まれ。1930(昭和5)年、日田郡立工芸学校描金科卒。同年、木版画制作を開始する。1932年、第2回日本版画協会展に《水郷の夏》を出品し初入選。1935年、第10回国画会展に《秋酣》を出品し初入選。1939年、油彩画に転向。1944年、国画会会員。1961年、大分県立芸術短期大学教授。1971年、第12回毎日芸術賞受賞。同年、大分県立芸術短期大学学長となる。カラフルな色彩と、絵具に水晶末を混ぜたマチエールが特徴。《王朝》等のシリーズは、高い評価を得ている。

糸園和三郎（いとどのわさぶろう）

【1911(明治44)年～2001(平成13)年】

中津市生まれ。1927(昭和2)年、上京し川端画学校や前田寛治写実研究所で学ぶ。1931年、第1回独立美術協会展に《老人》等3点を出品し入選。1943年、松本竣介、鬘光らとともに新人画会を結成。戦後は、自由美術家協会展や各種コンクール展等で活躍。1957年、第4回日本国際美術展に《鳥の壁》を出品し佳作賞。1968年、第8回現代日本美術展に《黒い水》、《黄色い水》を出品しK氏賞受賞。現代人が抱える孤独や不安といったものを描き続けた。

幸壽（ゆきひさし）

【1911(明治44)年～2003(平成15)年】

豊後大野市生まれ。1931(昭和6)年、早稲田大学中退。その後、満州へ渡る。1936年、第6回独立美術協会展に《馬尾と廃花》を出品し初入選。1940年、第1回美術文化協会展に入選。以後、同展を主舞台に活躍。1943年、第4回展で美術賞を受賞。1958年、新象作家協会を創立し、代表委員となった。1964年、新象作家協会を脱退し原初会を創立。1974年、《狂女》が東京国立近代美術館買い上げとなる。1995(平成7)年、京都東本願寺で《煩惱成就》(六曲一双屏風)を制作。《狂女》シリーズをはじめとする独自の絵画世界を展開した。



油野誠一（ゆのせいいち）

【1912(大正元)年～2009(平成 21)年】

臼杵市生まれ。1932(昭和 7)年、早稲田大学第二高等学院を中退後、独学で油彩画を学ぶ。独立美術協会展、新制作協会展等に出品。1948 年、スバル会の結成に参加。1953 年、第 17 回新制作協会展に《暗い街》《デソリヤの街》を出品し新作家賞を受賞。この頃から『世界少年少女文学全集』（創元社）等の挿絵を描き始める。1956 年、新制作協会会員。1972 年、絵本『おんどりのねがい』（岩波書店）で第 3 回講談社出版文化賞（絵本賞）受賞した。

矢岡勲（やおかいさお）

【1928(昭和 3)年～】

別府市生まれ。1948(昭和 23)年、大分県師範学校本科卒。1950 年、岩尾秀樹らとグループ「ネギ」の結成に参加。同年上京し、現展や独立美術協会展に出品。1952 年、第 26 回国画会展に《網のある風景》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1958 年、国画賞、1959 年、会友優作賞受賞。1963 年、国画会会員。その後、大田区美術協会理事等も務めた。別府の湯突き櫓に着想を得た初期の《輪》、後期の《雪山》等のシリーズで知られる。

工藤和男（くどうかずお）

【1933(昭和 8)年～】

大分市生まれ。1962(昭和 37)年、武蔵野美術大学卒。1957 年、創元会展に初出品し初入選。1963 年、創元会会員。1965 年、新日展に初入選。以後、新日展、改組日展、創元会展等を主舞台に活躍。1976 年、1979 年、改組日展で特選。1990(平成 2)年、創元会常任理事。1995 年、日展会員。2006 年、日展評議員。国内外の漁港を訪ね、「自然」「人間」「労働」をテーマに作画を展開。特に、漁港で働く漁師たちを描いた作品は、高い評価を得ている。

中山忠彦（なかやまただひこ）

【1935(昭和 10)年～】

北九州市生まれ。1944(昭和 19)年、中津市に転居。1953 年、上京し伊藤清永に師事。1954 年、第 10 回日展に初入選。1955 年、第 31 回白日会展で船岡賞を受賞。以後、日展、白日会展を主舞台に活躍。1958 年、白日会会員。1987 年、日展会員。1997(平成 9)年、1998 年に連続して日本芸術院賞を受賞。同年、日本芸術院会員となる。2002 年、白日会会長。2009 年、日展理事長。日本洋画壇を代表する画家の一人である。

佐藤哲（さとうてつ）

【1944(昭和 19)年～】

大分市生まれ。1966(昭和 41)年、大分大学学芸学部卒。1964(昭和 39)年、第 30 回記念東光会展に初入選。1975 年、第 7 回改組日展に初入選。以後、改組日展、東光会展を主舞台に活動を展開。1982 年、1993(平成 5)年の改組日展で特選を受賞。1994 年、文化庁現代美術選抜展。2002 年、日展評議員。2005 年、東光会展で文部科学大臣奨励賞、2009 年、改組日展で文部科学大臣賞を受賞。現在、東光会理事長。

荒木剛（あらかきごう）

【1911(明治 44)年～1958(昭和 33)年】

ソウル市生まれ。1930(昭和 5)年頃上京し、帝国美術学校(現：武蔵野美術大学)に進学。卒業後、独立美術協会展に出品を始める。1938 年、長崎市で個展。1939 年、美術文化協会の創立に参加。1940 年頃から国際写真情報社に勤務。1943 年、戦争の激化により長崎市(父の赴任地)に帰り、川南造船所に勤務。1946 年、家族と共に大分市に転居。1948 年、油野誠一、廣瀬通秀らとともにスバル会を結成した。

廣瀬通秀（ひろせみちひで）

【1920(大正 9)年～2015(平成 27)年】

日出町生まれ。竹田市で育つ。1941(昭和 16)年、日本大学専門部芸術科卒。1940 年、第 10 回独立美術協会展に《コンポジション》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1968 年、独立賞受賞。翌年、同協会会員となる。一方、1948 年、油野誠一らとスバル会を設立。1980 年、宇治山哲平らと潮流の会を結成。1986 年、大分県立芸術短期大学名誉教授。背景を分割した独特の画面構成と鮮やかな色彩で知られた洋画家であった。

神田千里（かんだせんり）

【1920(大正 9)年～1999(平成 11)年】

佐伯市生まれ。戦後、独学で油彩画の制作を開始。1952(昭和 27)年、第 16 回自由美術協会展に初出品。以後、同展を主舞台に活躍。1961 年、自由美術協会会員。その一方、スバル会、大分前衛美術会、七人の会、潮流の会等に話題作を出品し、県洋画壇に新風を送り続けた。また、大分県立芸術短期大学、別府大学等で教壇に立ち、後進の育成に尽力。1992(平成 4)年、大分県美術協会名誉会員となった。

岩尾秀樹（いわおひでき）

【1924(大正 13)年～2013(平成 25)年】

別府市生まれ。東京美術学校在学中、学徒動員で仙台予備士官学校に入隊。戦後帰郷し、宇治山哲平と親交を深める。1949(昭和 24)年、国画会展に《山腹》《静物》《山(緑)》の 3 点を初出品し国画賞を受賞（翌年も連続受賞）。以後、同展を主舞台に活躍。1958 年、国画会会員となった。1973 年、別府大学教授。1994(平成 6)年、同大名誉教授。ネギ、スバル会、七人の会、潮流の会等で話題作を発表するなど、県洋画壇を力強く牽引し続けた。

菅久（すがひさし）

【1926(大正 15)年～2014(平成 26)年】

丹東市生まれ。1945(昭和 20)年、現地召集兵として戦地へ。戦後、日出町に復員。1947 年から、中・高等学校で教壇に立つ一方、本格的な油彩画の制作を開始。1950 年、第 4 回二紀会展に《No. 5》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1986 年、二紀会会員。1993(平成 5)年、同会委員。1950 年のネギ、その後のスバル会、1980 年の潮流の会等に参加し、県洋画壇に新風を送り続けるとともに、数多くの展覧会評も手掛けた。

荒金透（あらがねとおる）

【1926(大正 15)年～2000(平成 12)年】

別府市生まれ。戦後、宇治山哲平に師事。1950(昭和 25)年、第 3 回スバル展にグループ「ネギ」のメンバーらとともに参加。1962 年、読売アンデパンダン展に出品。1986 年、日仏現代美術展でクリティック賞を受賞。1998(平成 10)年、第 2 回北の大地ビエンナーレ展で優秀賞を受賞した。

菅玲子（すがれいこ）

【1928(昭和 3)年～】

ソウル市生まれ。1946(昭和 21)年、大分県師範学校女子部本科卒。1949 年、洋画家菅久と結婚し、本格的な油彩画の制作を開始。1955 年、第 9 回二紀会展に《おんぶ》を初出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1965 年、二紀会同人。2010(平成 22)年、第 64 回二紀会展で同人賞。翌年、東日本復興祈願・芸術クリスマス展で、復興祈願芸術大賞を受賞。県洋画壇における女流画家の第一人者として活躍する。

飯尾寿夫（いいおとしお）

【1928(昭和 3)年～2017(平成 29)年】

竹田市生まれ。1951(昭和 26)年、熊本工業専門学校卒。30 歳を過ぎた頃から、本格的に油彩画の制作を開始。1958 年、第 22 回大分県美術展で県美術協会奨励賞。1967 年、第 21 回二紀会展に《民話 I》を出品し初入選。以降、同展を主舞台に活躍。1997(平成 9)年、第 51 回二紀会展に《アトリエ寓話 I》を出品し同人賞受賞。翌年、二紀会会員となる。2002 年から 2007 年まで、二紀会大分支部長を務めた。

江藤明（えとうめい）

【1929(昭和 4)年～】

大分市生まれ。1949(昭和 24)年、大分県師範学校本科卒。グループ「ネギ」や「スバル会」に出品。1953 年、第 27 回国画会展に《回想》を出品し初入選。同年の第 13 回大分県美術展に《蓮》を出品し、大分県知事賞。1961 年の大分前衛美術会、1980 年の潮流の会等にも参加。1983 年、第 57 回国画会展に《白い朝》を出品し、国画会会員に推挙される。1989(平成元)年、別府市美術館長。その後、別府大学で教壇に立った。

黒川洋孝（くろかわひろたか）

【1943(昭和 18)年～】

中津市生まれ。1966(昭和 41)年、武蔵野美術大学卒。1973 年、第 41 回独立美術協会展に初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1988 年、奨励賞、翌年、野口賞、1990(平成 2)年から二年連続で独立賞を受賞。1993 年、独立美術協会会員に推挙された。また、1991 年、1993 年に安井賞展、1998 年、小磯良平大賞展に出品。重なりあった新聞内で、何かが蠢いているような作画に特徴がある。

西村駿一（にしむらしゅんいち）

【1930(昭和 5)年～2018(平成 30)年】

別府市生まれ。1957(昭和 32)年、武蔵野美術専門学校卒。1965 年、第 39 回国画会展に初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1971 年、第 45 回展に《南より》を出品し野島賞、1978 年、第 52 回展に《街の詩Ⅲ》を出品し同会会友、1986 年、第 60 回記念展に《ふるさと' 86》を出品し同会会員推挙。1974 年、別府短期大学教授。1989(平成元)年、別府大学理事長。2012 年から 2018 年 3 月まで、別府市美術館館長を務めた。

山崎芳直（やまさきよしただ）

【1931(昭和 6)年～2005(平成 17)年】

佐伯市生まれ。1956(昭和 31)年、九州大学経済学部卒。銀行員として務める傍ら、1966 年、第 30 回自由美術協会展に初入選。1967 年、同会会員。以後、同展を主舞台に活躍。1980 年、潮流の会の結成に参加。1992(平成 4)年、日本美術家連盟会員。1996 年、新潮流の会代表。1999 年、アートプラザで「山崎芳直インスタレーション（特別参画）風倉匠」が開催される。個展、グループ展等の展評を数多く手掛け、県洋画壇を刺激した。

児玉成弘（こだましげひろ）

【1932(昭和 7)年～】

豊後大野市生まれ。1955(昭和 30)年、大分大学教育学部卒。1959 年、第 13 回二紀会展に《落城》を初出品し初入選。1962 年、第 17 回行動美術協会展に《作品－照》を初出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1983 年、第 38 回行動美術協会展に《街人Ⅰ》を出品し奨励賞。1991(平成 3)年、行動美術協会会員。県下では、大分前衛美術会、7 人の会、潮流の会等に参加し、精力的な活動を展開。近年は、自然環境をテーマにした作品を描き続けている。

十時良（とときりょう）

【1933(昭和 8)年～】

東京都三鷹市生まれ。1944(昭和 19)年、長崎市に疎開後、大分市に転居。1954 年、大分大学学芸学部卒。1957 年、第 21 回自由美術協会展に《買い物をする人たち》を初出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1966 年、自由美術協会会員。1994(平成 6)年、第 58 回自由美術協会展に《地表の風 94-6》を出品し平和賞を受賞。別府現代絵画展をはじめ、各種コンクール展に精力的に出品。また、多くの展評を執筆するなど、県洋画壇を刺激した。

二宮秀夫（にのみやひでお）

【1933(昭和 8)年～1984(昭和 59)年】

杵築市生まれ。大分大学学芸学部卒。1962(昭和 37)年、第 17 回行動美術協会展に出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1973 年、第 28 回行動美術協会展で奨励賞を受賞し、同協会会友となる。1975 年、行動美術協会会員。1985 年、山香町に「二宮秀夫記念館」がオープンし、様々な展覧会やイベント等が行われ話題を集めたが、その後、閉館した。

御手洗賢司（みたらいけんじ）

【1934(昭和 9)年～】

延岡市生まれ。武蔵野美術専門学校中退後、開学当初の大分県立芸術短期大学で学ぶ。大分県美術展では、1966(昭和 41)年、会員努力賞、1984 年、20 周年記念賞・OG 賞を受賞。その後、宇治山哲平の勧めで、1985 年、第 59 回国画会展に《予感(円卓)》を初出品し新人賞。1998(平成 10)年、第 72 回国画会展に《TOROS》を出品し安田火災美術財団奨励賞を受賞、国画会会員に推挙された。独特のフォルムと鮮やかな色彩による絵画作品は、高い評価を得ている。

松野良治（まつのりょうじ）

【1934(昭和 9)年～2019(平成 31)年】

日出町生まれ。大分県立緑丘高等学校卒。1952(昭和 27)年、国画会展に初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1966 年、国画新人賞。1969 年、国画会会友優作賞・サントリー賞。1975 年、国画会会員。1980 年、潮流の会に参加。1989(平成元)年、『大分の作家たち I 現代の美術「描く」』（大分県立芸術会館主催）に出品。1995 年、日田市の宇治山哲平美術館で個展が開催された。黒い塗料を塗った合板による重厚な画面構成が特徴である。

守末利宏（もりすえとしひろ）

【1937(昭和 12)年～】

杵築市生まれ。1960(昭和 35)年、大分大学学芸学部卒。1956 年、第 19 回大分県美術展に《家》を出品し初入選。1976 年、第 31 回行動美術協会展に《墓標》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1997(平成 9)年、第 52 回行動美術協会展に《ある光景 I》を出品し会友賞を受賞、同会会員に推挙された。大分では、潮流の会、新潮流展、現代美術の潮流展等にも積極的に参加し話題作を発表。郷里を思う抒情性豊かな作品は、高い評価を受けている。

高木岩義（たかぎいわよし）

【1939(昭和 14)年～】

臼杵市生まれ。1962(昭和 37)年、大分大学学芸学部卒。児玉成弘の勧めで油彩画の制作を始め、1973 年、第 28 回行動美術協会展に《大威徳明王》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活動を展開。1994(平成 6)年、第 49 回行動美術協会展に《午後の瞑想 94-2》を出品し会友賞を受賞、行動美術協会会員に推挙された。デカルコマニーを駆使した、鮮烈な色彩の抽象画家として高い評価を得ている。

仲築間英人（なかつくまひでと）

【1939(昭和 14)年～】

大分市生まれ。1962(昭和 37)年、大分大学学芸学部卒。1958 年、第 22 回大分県美術展に《静物》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1960 年、別府市長賞、翌年、県議会議長賞を受賞。1980 年、小川善規ら仲間たちとグループ「GEN」を結成。1985 年、第 39 回二紀会展に《壁による I》を出品し初入選。1989(平成元)年、二紀会同人。2013 年、二紀会会員。現在、二紀会大分支部事務局長。

岡崎健治（おかざきけんじ）

【1940(昭和 15)年～】

大分市生まれ。大分県立別府緑丘高等学校時代、洋画家の廣瀬通秀に師事。その後、美術教師を続ける一方で、独立美術協会展や大分県美術展、グループ展等で精力的に作品を発表する。1971(昭和 46)年、独立美術協会会友。1977 年、第 13 回大分県美術展で第 1 回 OG 賞を受賞。その後も北九州絵画ビエンナーレ展や現代美術選抜展など、各種コンクール展に選拔され、話題作を発表した。

後藤龍二（ごとうりゅうじ）

【1940(昭和 15)年～】

豊後大野市生まれ。大分大学学芸学部卒。1973(昭和 48)年、第 23 回モダンアート協会展に初入選。以後、1987 年まで出品。1977 年の第 20 回安井賞展、翌年の第 1 回北九州絵画ビエンナーレ展、1992(平成 4)年の第 1 回青木繁記念大賞公募展等、様々な公募展に積極的に出品し続けた。2003 年から 2 年間、日本文理大学非常勤講師。2005 年、朝倉文夫記念館長。写実表現に定評がある。

谷口晶之（たにぐちまさゆき）

【1943(昭和 18)年～2015(平成 27)年】

別府市生まれ。1966(昭和 41)年、多摩美術大学卒。1965 年、第 39 回国画会展に初入選。以後、同展を主舞台に活躍を続け、1972 年、国画賞、1977 年、サントリー賞と会友優作賞を受賞し国画会会員に推挙された。1973 年から大分県立芸術短期大学(現：大分県立芸術文化短期大学)で教壇に立ち、1979 年、同短大助教授、1989 年、教授となる。独特なフォルムも持つ抽象画を描き続けた。

山崎哲一郎（やまさきてついちろう）

【1945(昭和 20)年～】

大分市生まれ。1967(昭和 42)年、大分大学教育学部卒。1964 年、第 18 回二紀会展に《廃坑》を出品し初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1996(平成 8)年、二紀会会員。2001 年、会員賞、2009 年、会員優賞を受賞。2010 年、二紀会委員となる。また、青木繁大賞公募展をはじめとする各種コンクール展にも出品し数多くの賞を受賞した。1997 年、文化庁芸術家在外派遣研究員として英国に留学。2017 年、大分県美術協会副会長。生命の痕跡を描き続けている。

熊井惇（くまいじゅん）

【1914(大正 3)年～2004(平成 16)年】

杵築市生まれ。1934(昭和 9)年、大分県師範学校卒。1945 年、大潮展で特選受賞。1948 年、日展初入選(22 回入選)。1951 年、光風会展初入選。以後、日展、光風会展を主舞台に活躍。1959 年、光風会会友。1965 年、光風会会員。1978 年、渡欧。1981 年、大分県立芸術会館選抜秀作展に出品。1988 年、画業 50 年記念「熊井惇回顧展」を大分県立芸術会館で開催する。晩年は、ペインティングナイフを多用し、重厚なマチエールで臼杵石仏等を描いた。

多邨常（たむらつね）

【1925(大正 14)年～2006(平成 18)年】

杵築市生まれ。本名、多村直常。独学で、油彩画を学ぶ。1946(昭和 21)年、第 1 回大分県美術協会展に初入選。以後、同展を主舞台に活躍。1949 年、大分県教育委員会賞、1950 年、特選、1985 年、1989(平成元)年、1990 年、1995 年、1997 年、1998 年、大分県美術協会賞、1993 年、大分県美術協会優賞を受賞。杵築市の自宅にアトリエを構え、絵画教室を主宰。後進の育成に努めた。

利光敏郎（としみつとしろう）

【1934(昭和 9)年～】

大分市生まれ。1955(昭和 30)年、大分大学学芸学部卒。1955 年の第 17 回一水会展、翌年の第 22 回東光会展に入選。1962 年、東京学芸大学に国内留学し、倉田三郎に師事。1994(平成 6)年、第 70 回記念白日会展に《ひとときⅡ》を初出品し初入選。以後、白日会展、改組日展を主舞台に活躍。2003 年、第 79 回白日会展に《画室にて》を出品し、準会員奨励賞を受賞、白日会会員に推挙される。繊細な描写と優しい色使いによる人物画は、高く評価されている。

佐藤昇（さとうのぼる）

【1936(昭和 11)年～】

大分市生まれ。1959(昭和 34)年、大分大学学芸学部卒。1956 年、第 19 回大分県美術展に《工場》を出品し初入選。1961 年、第 27 回東光会展に《工場に見える風景Ⅰ》を初出品し初入選。以後、東光会展、大分県美術展を主舞台に活躍。1972 年、東光会会員に推挙された。ペインティングナイフを多用した重厚なマチエールが特徴で、初期・津久見の石灰山、中期・愛知の採土場、近年、国東の石仏を描く。

石川賢（いしかわけん）

【1938(昭和 13)年～】

宇佐市生まれ。1961 年、大分大学学芸学部卒。在学中の 1959 年、第 24 回大分県美術展に《或る風景》を出品し初入選。高文連美術部長、高教研事務局長等を務め、県下における美術教育に尽力。洋画家工藤和男の勧めで、1989(平成元)年、第 48 回創元会展に《遠い日》を初出品し初入選。以後、同展を主舞台に本格的な作家活動を展開。1993 年、創元会会員に推挙された。



第1章 近代洋画の黎明

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
1	諫山麗吉	1851	沈墮之瀧	1901	88.5×130.0	油彩・キャンバス	大分県立美術館
2	藤米岳	1853	花鳥図	1875	各117.2×33.0	絹本墨画淡彩	大分市美術館
3	藤米岳	1853	竹石霜柯図	1880	112.4×30.9	紙本墨画淡彩	大分市美術館
4	片多徳郎	1889	能面の図	1914	32.5×45.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
5	片多徳郎	1889	湖畔春色	1916	80.5×130.4	油彩・キャンバス	大分市美術館

第2章 片多徳郎と西ヶ原グループ

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
6	片多徳郎	1889	中禅寺湖	1919	60.0×80.0	油彩・キャンバス	別府市美術館
7	片多徳郎	1889	牡丹花三輪	1922	50.0×59.5	油彩・キャンバス	大分市美術館
8	権藤種男	1891	桜並木	1930	45.0×58.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
9	権藤種男	1891	T嬢の像	1947	90.9×72.7	油彩・キャンバス	大分県立美術館
10	菅一郎	1894	緑陰散髪	1942	130.3×97.0	油彩・キャンバス	大分県立美術館
11	保田善作	1897	洗濯	1925	90.0×116.0	油彩・キャンバス	大分県立美術館
12	江藤純平	1898	椿	1931	73.0×91.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
13	佐藤敬	1906	暁	1940	130.5×193.6	油彩・キャンバス	大分市美術館

第3章 戦前・戦後の教育者たち

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
14	山下鉄之輔	1887	別府山景	不詳	39.0×51.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
15	山下鉄之輔	1887	人物	1930	80.5×60.5	油彩・キャンバス	大分県立美術館
16	武藤完一	1892	高崎山遠望(別府春木川にて)	1938	23.2×32.4	油彩・板	大分市美術館
17	武藤完一	1892	冬の海(白木にて)	1938頃	31.0×40.2	油彩・キャンバス	大分市美術館
18	浜田九一郎	1909	岩屋寺石仏	1955	128.0×96.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
19	田中昇	1915	アカシア	1960	72.0×90.9	油彩・キャンバス	大分市美術館

第4章 大分県美術協会の創設と歴代の会長たち

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
20	権藤種男	1891	庭	1949	70.0×89.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
21	権藤種男	1891	高崎山遠望	1950	72.7×90.9	油彩・キャンバス	大分市立上野ヶ丘中学校蔵
22	宮崎豊	1903	カイロの朝	1969	72.7×91.0	油彩・キャンバス	別府市美術館
23	進來哲	1905	面を持つ女	1980	158.0×127.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
24	仲町謙吉	1920	仏Ⅱ	1983	193.5×258.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
25	脇正人	1926	コンポジションB	1986	145.5×112.1	油彩・キャンバス	大分市美術館
26	脇坂秀樹	1930	残象	1964	130.0×162.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
27	渡辺恭英	1936	断裂Ⅱ	1985	192.5×160.5	油彩・キャンバス	大分市美術館
28	小川善規	1941	平原の月	2006	130.3×130.3	油彩・キャンバス	個人蔵
29	日金子金一郎	1943	作品Ⅰ	1985	112.0×162.0	油彩・キャンバス	大分市美術館

## 第5章 海外で活躍した洋画家たち

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
30	荒井龍男	1904	紫の中	1952	195.5×140.2	油彩・キャンバス	大分県立美術館
31	佐藤敬	1906	空間の歴史(黒)	1965	162.3×130.2	油彩・キャンバス	大分市美術館
32	吉村益信	1932	菜の花畑	1974	97.2×162.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
33	風倉匠	1936	アウグスチヌスの時間	1969	193.9×97.0	油彩・キャンバス	大分市美術館

## 第6章 県外で活躍した洋画家たち

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
34	江藤純平	1898	オリーブの畑	1982	90.5×116.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
35	江藤哲	1909	灯台	不詳	132.0×163.5	油彩・キャンバス	別府市美術館
36	宇治山哲平	1910	絵画No.257-259(凜)	1971	97.0×453.4	油彩・キャンバス	大分市美術館寄託
37	糸園和三郎	1911	小卓上の枯れ花	1962頃	45.5×53.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
38	糸園和三郎	1911	鳥の壁	1963	72.7×60.6	油彩・キャンバス	大分市美術館
39	糸園和三郎	1911	四つのビルディング	1974	130.0×97.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
40	幸壽	1911	別れを惜しむ狂女	1987	160.8×129.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
41	油野誠一	1912	デソリヤの街	1953	181.8×259.1	油彩・キャンバス	大分市美術館
42	矢岡勲	1928	車による(A)	1962	162.1×130.3	油彩・キャンバス	大分市美術館
43	工藤和男	1933	琉球の舞	1993	160.0×130.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
44	中山忠彦	1935	羽根かざりの帽子	1988頃	45.6×38.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
45	佐藤哲	1944	ニコラス20	2006	194.0×162.0	油彩・キャンバス	大分市美術館

## 第7章 個性的な美術グループ(革新系)

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
46	荒木剛	1911	室内	1949	71.0×69.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
47	廣瀬通秀	1920	モニュメント	1977	181.8×227.3	油彩・キャンバス	大分市美術館
48	神田千里	1920	連鎖する形	1982	112.1×145.5	油彩・キャンバス	大分市美術館
49	岩尾秀樹	1924	水田と海	1998	162.1×130.3	油彩・キャンバス	大分市美術館
50	菅久	1926	記憶の中の風景／連	1987	97.0×162.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
51	荒金透	1926	崇高	1969	65.0×65.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
52	菅玲子	1928	バスストップ	1976	162.1×130.3	油彩・キャンバス	大分市美術館
53	飯尾寿夫	1928	海辺のセレモニイ	1981	162.1×162.1	油彩・キャンバス	大分市美術館
54	江藤明	1929	MY SPACE	1981	194.0×194.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
55	西村駿一	1930	ふるさと	1998	160.0×128.5	油彩・キャンバス	大分市美術館
56	山崎芳直	1931	ポエジアB	1999	145.5×145.5	油彩・キャンバス	大分市美術館
57	児玉成弘	1932	街角91-7	1991	182.0×227.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
58	十時良	1933	地表の風94-6	1994	162.1×162.1	木炭、和紙、アルミホイル他	大分市美術館
59	二宮秀夫	1933	人(Ⅲ)	1983	182.0×227.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
60	御手洗賢司	1934	予感(未来)	1986	130.0×194.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
61	松野良治	1934	鋭	1994	162.0×162.0	塗料・鉛筆、板	大分市美術館
62	守末利宏	1937	遠き日	2008	194.0×162.0	油彩・キャンバス	個人蔵
63	高木岩義	1939	午後の瞑想09-天景	2009	227.0×182.0	油彩、デカルコマニー・キャンバス	大分市美術館

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
64	仲築間英人	1939	朝	2011	162.0×194.0	油彩、テンペラ・キャンバス、ボローニャ石膏	個人蔵
65	岡崎健治	1940	想(2)	1977	181.8×227.3	油彩・キャンバス	個人蔵
66	後藤龍二	1940	そこにある0403	2004	161.0×129.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
67	谷口昌之	1943	白と黒'78-1	1978	160.0×130.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
68	黒川洋孝	1943	私の空間から	2017	116.0×116.0	油彩・キャンバス	個人蔵
69	山崎哲一郎	1945	地質時代(折れまがる化石魚)	1994	163.0×163.0	油彩・キャンバス	大分市美術館

#### 第8章 県内在住で日展系公募展に出品する洋画家たち

No.	作家名	生年	作品名	制作年	寸法	素材・技法	所蔵先
70	熊井惇	1914	楽暫閑	1948	91.0×116.7	油彩・キャンバス	大分市美術館
71	多邨常	1925	朝陽	1993	130.5×162.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
72	利光敏郎	1934	陽光	2015	162.0×130.3	油彩・キャンバス	大分市美術館
73	佐藤昇	1936	瀬戸の丘(陶土)	1979	112.0×145.0	油彩・キャンバス	大分市美術館
74	石川賢	1938	オストーニ讃Ⅱ	2014	194.0×162.0	油彩・キャンバス	大分市美術館



## 第 1 章 近代洋画の黎明

近代洋画の黎明期に活躍した洋画家に、高橋由一や五姓田義松がいる。彼らは、独自で画材を開発するとともに、1861(文久元)年に来日し、横浜居留地に住んでいたイギリス人新聞報道画家のワグマンに、言葉の違いに戸惑いながら、苦勞して油絵技法を学んだ。1868(明治元)年、時代は明治へと移り、積極的に西洋文化を学ぶ時代が到来。この時、油絵技法を修得した画家たちはこぞって画塾を立ち上げる。1869年、川上冬崖が「聴香読画館」を、1873年、高橋由一が「天絵楼」を、1874年、国沢新九郎が「彰枝堂」を開き、油絵技法の普及を開始。明治政府も専門の技術者を育成し、日本の近代化を図る目的で、1876年、工部美術学校を開学(1883年閉校)。イタリアから画家のフォンタネージ、彫刻家のラグーザ、建築家のカペレッティを招き、浅井忠、小山正太郎、松岡寿らが、本格的な西洋技法を学んだ。大分からも、1875年に中津出身の諫山麗吉が、翌年に臼杵出身の藤雅三(米岳)が、それぞれ国沢新九郎の「彰枝堂」に入塾。その後、藤は工部美術学校に進学し、フォンタネージの指導を受けた。さらに、1885年に藤が、1892年頃に諫山が、それぞれ渡仏。二人は帰国せず、海外で活動する道を選んだ。仮に、ラファエル・コランに師事した藤が、黒田清輝や久米桂一郎とともに帰国していれば、少なからず近代日本洋画の歴史は変わっていたかも知れない。

## 第 2 章 片多徳郎と西ヶ原グループ

豊後高田出身の片多徳郎は、1915(大正 4)年から関東大震災が起きる 1923 年まで、東京・駒込の西ヶ原にアトリエを構えていた。当時の片多は、1915年の第 9 回文展に《伐木之図》を出品し、褒状を受賞。1917年の第 11 回文展に《伎女舞踊の図》を、翌年の第 12 回文展に《花下竹人》を出品し、2 年連続で特選を受賞した。さらに、1919年の第 1 回帝展に《霹靂》を出品し監査外出品資格者の推薦を受け、1922年の第 4 回帝展からは審査員に任命される等、まさに脂の乗った時代でもあった。

この西ヶ原のアトリエに出入りしたのが、洋画家の権藤種男、菅一郎、保田善作、後藤真吉、江藤純平、三浦直政、彫刻家の片岡角太郎、日名子実三、歌人の三浦義一、辛島キミといった芸術家たちである。彼らは、片多のアトリエで酒を飲んだり、花札をして騒いだり、作品批評や芸術論をたたかわせた。同時に、画家としての名声を高めていく片多の影響を強く受けたのである。この芸術家集団を“西ヶ原グループ”や“西ヶ原族”と呼んだ。

その後、片多は、1929(昭和 4)年に淀橋区下落合、1933年に豊島区长崎東町に転居するが、この時期、新たに洋画家の進来哲、佐藤敬、三輪省三らがよく出入りしたと伝えられている。

## 第 3 章 戦前・戦後の教育者たち

大分の地は、大正期に帝展審査員となった片多徳郎、戦後県美術協会を復興させた権藤種男、パリで活躍した佐藤敬など、優れた洋画家たちを数多く輩出している。このような状況を生み出すには、彼らに美術の魅力を伝えるとともに、適切な指導・助言を行うことのできる優れた美術教師の存在が不可欠である。

県洋画壇に大きな影響を与えた美術教師に、福岡出身の山下鉄之輔、岐阜出身の武藤完一、武田由平、長崎出身の浜田九一郎、熊本出身の田中昇、臼杵出身の仲町謙吉らがいる。

山下鉄之輔は、1912(大正元)年、岸田劉生らとともにフェウザン会の設立に参加した人物。片多(大分中学時代、松本古村の指導を受けた)の勧めで、大分中学で教壇に立った(1916-1926 まで)。教え子には、宮崎豊や佐藤敬、高山辰雄や幸壽らがいる。

武藤完一(版画家)は、日本画家の首藤雨郊の後任として大分師範に赴任した人物。教え子に、宇治山哲平(版画制作の個別指導を受けている)、熊井惇、仲町謙吉(大分師範時代)、脇正人らがいる。

武田由平(版画家)は、武藤の勧めで中津中学に赴任した人物。教え子に、山本常一、中山忠彦、長野静司らがいる。

浜田九一郎は、女子師範や大分大学で教壇に立った人物。教え子に、菅玲子らがいる。

田中昇は、女子師範や大分県立第二高等女学校、上野丘高等学校等で教壇に立った人物。教え子に、利光敏郎らがいる。

仲町謙吉は、大分大学で教壇にたった人物。教え子には、脇坂秀樹、佐藤昇、守末利宏、石川賢、仲築間英人、小川善規、日名子金一郎、山崎哲一郎らがいる。

その他にも、大分県立芸術短期大学初代学長の宇治山哲平、同短大名誉教授の廣瀬通秀、別府大学名誉教授の岩尾秀樹、大分大学教育学部教授を務めた渡辺恭英といった指導者が、県洋画壇に強い影響を与えるとともに、数多くの後進の育成に尽力した。

#### 第 4 章 大分県美術協会の創設と歴代の会長たち

大分県美術協会は、1937(昭和 12)年 6 月 25 日大分市の桜町クラブの総会で産声をあげた。音頭を取ったのは、前年 12 月 19 日付けで大分高商(現：大分大学経済学部)校長として赴任して来た石丸優三である。外交官として欧米に駐在後、文部省学芸課長を務めた経歴の持ち主で、美術に対する造詣のひときわ深い人物であったという。石丸は、県内にまとまった美術協会が無いことを知り、組織の結成を模索。県内作家に参加を呼びかけ、武藤完一、菅一郎、松本古村ら 27 名がこれに応じた。その場で初代会長に石丸優三が、顧問に福田平八郎、朝倉文夫、首藤定がそれぞれ選出され、同年 11 月 20 日から大分県公会堂で第 1 回大分県美術協会展が開催された。しかし、同協会は、1943 年の第 10 回展終了後、戦争による混乱の中、自然消滅した。

戦後、県美協を新たに再建しようと努めたのが、権藤種男、宮崎豊、早川正、中山和美、大分合同新聞記者の渡辺秀郎らである。彼らは、バラック建てのキムラヤに集まり、数度にわたり再建に向けての会合を持つ。再結成大会を 1946 年 6 月 2 日午後 1 時大分市荷揚町国民学校と決め、消息の分かる限りの県内作家に案内状を発送。集まった作家は 65 人。初代会長には、権藤種男が選出された。

現在の大分県美術協会は、1965 年に、旧大分県美術協会(日本画部・洋画部・彫刻部・工芸部)と、大分県書道協会、大分県写真作家協会の三つの団体を統合し、再結成したものである。

初代会長は、日本画家の溝辺有巢。以後、洋画家の宮崎豊、進来哲、浜田九一郎、仲町謙吉、脇正人、脇坂秀樹、渡辺恭英、彫刻家の合田習一、洋画家の小川善規、日名子金一郎が会長を務めている。

## 第 5 章 海外で活躍した洋画家たち

海外に渡り、精力的な活動を展開した大分の洋画家たちがいる。

戦後では、モダンアート協会を主舞台に活躍し、その後、ニューヨーク、パリ、サンパウロ等で個展を開催し大好評を博した荒井龍男。1931(昭和 6)年から 1934 年まで渡仏し、1931 年のサロン・ドートンヌに入選を果たした佐藤敬。佐藤は戦後、再渡仏し、パリを拠点に《古墳》等をテーマにした独自の抽象絵画を展開。美術評論家のミシェル・ラゴンから「自然主義的抽象画」と高く評された。1960 年、篠原有司男らと「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」を結成し、反芸術的なオブジェを発表する等、注目を集めた吉村益信。吉村は、1962 年に渡米し、ニューヨークを拠点に活動。1966 年の帰国後は、ネオン管を用いたライトアートと発注芸術を展開。60 年代から 70 年代を代表する日本の現代美術家として高い評価を得ている。吉村とともに「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」の結成に参加し、その後、国内外で数々の伝説的なパフォーマンスを行った風倉匠。日本を代表するパフォーマーとして高く評価されている。その他にも多くの県内洋画家たちが、海外に渡り大いに活躍した。

## 第 6 章 県外で活躍した洋画家たち

大分を離れ、関東・関西周辺にアトリエを構え、創作活動を展開した洋画家たちがいる。関東では、日展の中心メンバーとして活躍した臼杵出身の江藤純平(日展参与・光風会名誉会員)、国見出身の江藤哲(日展参与)、大分出身の工藤和男(日展評議員・創元会会長)、佐藤哲(日展副理事長・東光会理事長)、小・中・高と中津で育った中山忠彦(日展顧問・元日展理事長・白日会会長)。自由美術協会展や各種コンクール展で活躍し、現代人が抱える孤独や不安を描き続けた中津出身の糸園和三郎(元自由美術協会会員)、各地を流浪し、人間の苦悩を画中に刻み込んだ幸壽(元新象作家協会代表委員)、独学で油彩画を学び、独立美術協会展や新制作派協会展で活躍した臼杵出身の油野誠一(新制作派協会会員)。油野はその後、絵本作家としても大活躍した異色の画家でもある。さらに、国画会の有力画家として活躍した別府出身の矢岡勲(国画会会員)等がいる。

関西では、1953(昭和 28)年から 1961 年まで奈良にアトリエを構え、国画会を主舞台に活躍した日田出身の宇治山哲平(国画会会員)等がいる。

## 第 7 章 個性的な美術グループ（革新系）

大分では、戦後のスバル会をはじめとする個性的な美術グループが数多く結成され、県洋画壇を大いに刺激した。

スバル会は、1948 年 7 月、「真の自由、真の個性について深く考えられるようになったこのとき、大分県に住むことの spontaneity（土着性）と美術の国際性を自覚するモンジュアリズム（世界主義）の立場に絵画精神の焦点を置き、美術の創造に前進する」との宣言文を掲げ、油野誠一、早川正、三重野一郎、廣瀬通秀、荒木剛によって結成された美術グループ。1959 年に解散するまで、計 12 回の本展と習作展を開催。岩尾秀樹、菅久、田中昇、小野一郎、江藤明、神田千里といった、後の県洋画壇を牽引した作家たちを輩出。計 35 名が参加した。

新世紀群は、キムラヤを拠点に、新しい造形美を探求しようと、吉村益信、熊谷博、佐藤至良、島川隆介、木村成敏らによって結成された若手美術グループ。1951 年に第 1 回展を開催している。



県展落選組に呼びかけた落選展や、著名な講師による講演会、若草公園での野外展等で話題を集めた。その後、磯崎新や三浦勉、赤瀬川原平、風倉匠など、多くの若手が参加した。

I（鬨）会は、1957 年、「友情と情熱をもって無限の芸術を探求する」との宣言文を掲げ、早川正、廣瀬通秀、脇正人、中條正一、小野一郎、幸壽、末永要らによって結成された前衛美術グループで、県下でも話題となった。

大分前衛美術会は、1960 年 6 月 18 日、「われわれは平和を根幹とした、きびしい現実認識のうえに立って創作し、批評の場を組織する」との宣言文を掲げ、井上佐之助、神田千里、十時良、脇正人、菅久、安藤真、児玉成弘、江藤明によって結成され（菅久は展覧会に出品していない）、1966 年に解散するまで計 6 回の展覧会を開催し、研鑽に努めた。

グループ 0 は、古長康典、渡辺恭英、早川和、仲築間英人、木村方昭、広田肇一ら大分大学学芸学部学生らによって、1961 年に結成された美術グループ。その後、卒業生や在学生らも参加し、互いに自己研鑽に努めた。また、参加者に美術教師が多かったことも同グループの特徴である。

グループ 29 会は、1964 年、後藤敬吾、田崎徹、佐藤昇、高村陽二、清水和雄、手嶋哲也、花崎宏志、島末倬至、末光慎治、宮崎喜恵ら、大分大学同級生らによって結成された美術グループ。名称の 29 会は、昭和 29 年に入学したことに由来している。計 29 回の展覧会と喜寿記念展を開催し、長きにわたり活動を続けた。

7 人の会は、1967 年、「お互いの作家意識の確認と清新なる発表の場を創る」との宣言文を掲げ、岩尾秀樹、神田千里、児玉成弘、二宮秀夫、廣瀬通秀、三浦勉、脇正人によって結成された美術グループ。1972 年に解散するまで、計 4 回の展覧会を開催。その間、井上佐之助、新名隆男、渡辺恭英、飯尾寿夫、西村駿一が新たに参加した。

潮流の会は、1980 年 8 月 5 日、「大分の地にあたらしいエネルギーの結集体誕生が待たれて久しい。1980 年に始まる展望の中で、私どもは個々の表現の自由を尊重し、さらによりゆたかな絵画創造を願って、ここに結集した。私どもは、所属の団体を超えて、生気に満ちた交流と研鑽の場を求め、激しく渦巻く潮流を目指したい。」との宣言文を掲げ、宇治山哲平を中心に、県在住作家 27 名により結成された美術グループ。国画会展、独立美術協会展、自由美術協会展、行動美術協会展、二紀会展等に出品を続ける会員・会友クラスの洋画家たちが、互いの作品を批評し合い、自己研鑽に努めた。1986 年 4 月 13 日の総会で解散するまで、計 6 回の展覧会を開催。県内大学教授も数多く参加したため話題を集め、県洋画壇に強い影響を与えた。

新潮流の会は、1986 年 5 月、「現実の認識と表現の自由とを尊重しつつ、多様な絵画創造の成果を発表するものです。このことが大分の文化創造への新たなエネルギーになることを願っています。」との宣言文を掲げ、岩尾秀樹、岡崎健治、神田千里、久間清喜、児玉成弘、十時良、檜垣正喜、日名子金一郎、松野良治、御手洗賢司、守末利宏、山川公丈、山崎哲一郎、山崎芳直、脇正人、渡辺恭英によって結成された。1996（平成 8）年の第 10 回展開催後解散するが、その間、仲築間英人や高木岩義といった計 30 名の洋画家たちが参加。

その後、現代美術の潮流展（1996 年－2000 年）、新潮流展（2001 年－2005 年）、現在の潮流展へと引き継がれ、その活動は、県洋画壇に新風を送り続けている。

このように、戦後の県洋画壇には、様々な美術グループが誕生し、個性溢れる活動を展開した。



## 第 8 章 県内在住で日展系公募展に出品する洋画家たち

現在の日展は、管轄する省等の変更や財団化によって名称が時代とともに変化している。1907(明治 40)年文部省美術展覧会(文展)→1919(大正 8)年帝国美術院展覧会(帝展)→1937(昭和 12)年文部省美術展覧会(新文展)→1946 年日本美術展覧会(日展)→1958 年社団法人日展(新日展)→1969 年社団法人日展(改組日展)→2014(平成 26)年社団法人日展(改組新日展)である。

さらに、1912 年創設の光風会展、1924 年の白日会展、1932 年の東光会展、1940 年の創元会展等は、この日展から枝分かれした美術展であるため、日展系公募展として位置付けられる。

大分からも、この日展系公募団体に所属しながら活躍を続ける洋画家たちがいる。光風会会員で、日展にも度々入選した杵築出身の熊井惇や臼杵出身の仲町謙吉。東光会会員で、大田村出身の脇坂秀樹や元会員で大分出身の佐藤昇。白日会会員で、日展にも度々入選した大分出身の利光敏郎。設立当初の創元会展で活躍した杵築出身の多邨常や会員で宇佐出身の石川賢などである。同時に彼らは、中央公募団体展の大分支部を創設。1962 年に東光会大分支部の豊光会(翌年第 1 回展を開催)、1985 年に白日会大分支部、1992 年に創元会大分支部等が組織され各団体の伸張を図っている。

## 「ふるさと 大分の洋画家たち 関連年譜」

別紙5

## 【国内】

- 一八九九年 川上冬崖が「聴香読画館」を開く。
- 一八七一年 文部省を設置。古文化財保護のため太政官「古器旧物保存方」を布告。
- 一八七三年 高橋由一が「天絵楼」を開く。
- 一八七四年 国沢新九郎が「彰技堂」を開く。
- 一八七六年 工部美術学校が開校する。
- 一八七七年 第一回内国勸業博覧会が開催される。
- 一八八二年 フェノロサが「美術真説」を発表する。
- 一八八九年 東京美術学校が開校する。  
明治美術会が結成される。  
山本芳翠が「生巧館」を開く。
- 一八九〇年 帝室技芸員設置。岡倉覚三(天心)、東京美術学校校長となる。
- 一八九三年 黒田清輝がフランスから帰国する。
- 一八九四年 黒田清輝が「天心道場」を開く。
- 一八九六年 黒田清輝、久米桂一郎が白馬会を結成する。  
東京美術学校に西洋画科ができる。
- 一八九七年 古社寺保存法が公布される。
- 一八九八年 岡倉天心、橋本雅邦、横山大観らが、日本美術院を創立。
- 一九〇〇年 雑誌「明星」が創刊され、藤島武二らが表紙・挿絵を描く。
- 一九〇一年 関西美術会が創立される。  
明治美術会が解散し、太平洋画会が結成される。
- 一九〇六年 日本美術院が茨城県五浦の研究室に移る。
- 一九〇七年 第一回文部省美術展覧会(文展)が開催される。
- 一九一〇年 武者小路実篤らが雑誌「白樺」を創刊し、高村光太郎が「緑色の太陽」を発表する。
- 一九一二年 岸田劉生、斎藤与里らがフェウザン会を結成する。  
小林萬吾、中沢弘光らが光風会を結成する。
- 一九一三年 梅原龍三郎の滞欧作品展(ヴィナス倶楽部)が開催される。
- 一九一四年 石井柏亭、有島生馬らが二科会を結成する。
- 一九一五年 岸田劉生、木村荘八らが草土社を結成する。  
二科会会場で、安井曾太郎の滞欧作品が特別展示される。
- 一九一八年 土田麦僊、村上華岳らが国画創作協会を結成する。  
山本鼎、織田一磨らが日本創作版画協会を結成する。
- 一九一九年 第一回帝国美術院展覧会(帝展)が開催される。
- 一九二二年 岸田劉生、萬鉄五郎らが春陽会を結成する。  
神原泰、古賀春江らがアクションを結成する。
- 一九二三年 萬鉄五郎らが円鳥会を結成する。  
村山知義らがマヴォを結成する。
- 一九二四年 アクション、マヴォ、未来派が三科を結成する。  
中沢弘光らが白日会を結成する。
- 一九二六年 梅原龍三郎らが国画創作協会に洋画部を新設する。  
前田寛治、里見勝蔵らが一九三〇年協会を結成する。
- 一九二八年 梅原龍三郎らが国画会を結成する。
- 一九三〇年 児島善三郎、里見勝蔵らが独立美術協会を結成する。
- 一九三二年 熊岡美彦らが東光会を結成する。
- 一九三六年 猪熊弦一郎、脇田和らが新制作派協会を結成する。
- 一九三七年 第一回文部省美術展覧会(新文展)が開催される。  
第一回文化勲章を竹内栖鳳、横山大観、岡田三郎助、藤島武二が受章する。  
長谷川三郎、瑛九、山口薫らが自由美術家協会を結成する。
- 一九三八年 山口長男らが九宝会を結成する。
- 一九三九年 美術文化協会が結成される。
- 一九四〇年 藤田嗣治が帰国する。  
大久保作次郎らが創元会を結成する。

## 【県内】

- 一八七五年 諫山麗吉が国沢新九郎の「彰技堂」に入門。
- 一八七六年 藤雅三(米岳)が「彰技堂」に入門。その後、工部美術学校に進学。
- 一八七七年 諫山麗吉が第一回内国勸業博覧会で褒状を受賞。
- 一八八五年 藤雅三(米岳)が渡仏。
- 一八八八年 藤雅三(米岳)がサロンに初入選。
- 一八九二年頃 諫山麗吉が渡仏。
- 一九〇六年 諫山麗吉がパリにて逝去。
- 一九一二年 山下鉄之輔がフェウザン会の結成に参加。
- 一九一六年 藤雅三(米岳)がニューヨークにて逝去。  
山下鉄之輔が大分中学に赴任。
- 一九一七年 片多徳郎が第一回文展で特選。  
権藤種男が第一回文展に初入選。
- 一九一八年 片多徳郎が第二回文展で特選。
- 一九二一年 第一回九州沖繩八県連合美術展が開催される。  
菅一郎が第三回帝展に初出品し特選。
- 一九二二年 片多徳郎が帝展審査員となる。
- 一九二四年 保田善作が第五回帝展に初入選。  
江藤純平が第五回帝展に初入選。
- 一九二五年 武藤完一が大分県師範学校に赴任。
- 一九二七年 進來哲が第八回帝展に初入選。
- 一九二八年 江藤純平が第九回帝展で特選。
- 一九二九年 江藤純平が第一〇回帝展で特選。  
佐藤敬が第一〇回帝展に初入選。
- 一九三一年 佐藤敬が渡仏(一九三四年まで)。  
佐藤敬がサロン・ドートンヌに初入選。
- 一九三二年 佐藤敬が第一三回帝展で特選。
- 一九三三年 江藤純平が第一四回帝展で特選。
- 一九三四年 片多徳郎が逝去する。
- 一九三五年 宇治山哲平が第一〇回国画会展に初入選。
- 一九三六年 佐藤敬が新制作派協会の結成に参加。
- 一九三七年 田中昇が大分県女子師範学校他に赴任。  
石丸優三らが中心となり大分県美術協会が結成される(一九四三年まで)。  
荒井龍男、糸園和三郎が自由美術家協会の結成に参加。
- 一九四〇年 廣瀬通秀が第一〇回独立美術協会展に初入選。
- 一九四三年 浜田九一郎が大分師範学校に赴任。

## 大分市美術館 平成 30 年度（2018 年度）調査・研究報告

- 一九四三年 巖光、松本俊介、麻生三郎らが新人画会を結成する。
- 一九四五年 向井潤吉、田中忠雄らが行動美術協会を結成する。
- 一九四六年 第一回日本美術展覧会(日展)が開催される。
- 一九四七年 熊谷守一、宮本三郎らが第二紀会を結成する。
- 一九四九年 岩尾秀樹が第二三回国画会展に初出品し国画賞。
- 一九五〇年 山口薫らがモダンアート協会を結成する。  
文化財保護法が制定される。
- 一九五三年 第二紀会から二紀会に名称が変更される。
- 一九五四年 吉原治良らが具体美術協会を結成する。
- 一九五八年 第一回日展(新日展)が開催される。
- 一九五九年 国宝修理装演師連盟が設立される。
- 一九六〇年 篠原有司男、吉村益信らがネオ・ダダイズム・オルガナイザーズを結成する。
- 一九六九年 第一回日展(改組日展)が開催される。
- 一九四六年 仲町謙吉が第六回新文展に初入選。  
糸園和三郎が新人画会の結成に参加。
- 一九四六年 権藤種男らが中心となり大分県美術協会が再結成される。
- 一九四七年 江藤哲が第三回日展で特選。  
油野誠一、早川正らがスバル会を結成する。
- 一九四八年 熊井惇が第四回日展に初入選。
- 一九五〇年 荒井龍男がモダンアート協会の結成に参加。  
菅久が第四回二紀会展に初入選。
- 一九五二年 荒井龍男がニューヨーク、パリ、サンパウロで個展を開催し好評を博す(一九五五年まで)。  
矢岡勲が第二六回国画会展に初入選。  
松野良治が第二六回国画会展に初入選。  
神田千里が第一六回自由美術協会展に初入選。
- 一九五三年 油野誠一が第一七回新制作協会展で新作家賞を受賞。  
江藤明が第二七回国画会展に初入選。
- 一九五四年 中山忠彦が第一〇回日展に初入選。  
脇正人が第一八回自由美術協会展に初入選。
- 一九五五年 菅玲子が第九回二紀会展に初入選。
- 一九五七年 十時良が第二一回自由美術協会展に初入選。
- 一九五八年 幸壽が新象作家協会を結成。
- 一九五九年 脇坂秀樹が第二五回東光会展に初入選。
- 一九六〇年 神田千里、脇正人らが大分前衛美術会を結成する。
- 一九六一年 佐藤昇が第二七回東光会展に初入選。
- 一九六二年 吉村益信が渡米(一九六六年まで)。  
児玉成弘が第一七回行動美術協会展に初入選。  
二宮秀夫が第一七回行動美術協会展に初入選。  
小川善規が第二八回東光会展に初入選。
- 一九六三年 宮崎豊が第二八回一水会展に初入選。
- 一九六四年 山崎哲一郎が第一八回二紀会展に初入選。
- 一九六五年 大分県美術協会(日・洋・彫・工部)、大分県書道協会、大分県写真作家協会の三団体が統合し、新たな大分県美術協会が結成される。  
西村駿一が第三九回国画会展に初入選。  
谷口晶之が第三九回国画会展に初入選。
- 一九六六年 山崎芳直が第三〇回自由美術協会展に初入選。
- 一九六七年 飯尾寿夫が第二一回二紀会展に初入選。  
日名子金一郎が第三一回自由美術協会展に初入選。  
岩尾秀樹、廣瀬通秀らが7人の会を結成する。
- 一九七三年 高木岩義が第二八回行動美術協会展に初入選。  
後藤龍二が第二三回モダンアート協会展に初入選。  
岡崎健治が第四一回独立美術協会展に初入選。  
黒川洋孝が第四一回独立美術協会展に初入選。
- 一九七六年 守末利宏が第三一回行動美術協会展に初入選。  
工藤和男が第八回改組日展で特選。
- 一九八〇年 宇治山哲平を中心に潮流の会が結成される。
- 一九八二年 佐藤哲が第一四回改組日展で特選。
- 一九八三年 渡辺恭英が第四七回新制作協会展に初入選。
- 一九八五年 御手洗賢司が第五九回国画会展に初出品し新人賞。  
仲築間英人が第三九回二紀会展に初入選。
- 一九八六年 新潮流の会が結成される。  
風倉匠がバリのボンビドー・センターでパフォーマンスを行う。
- 一九八九年 石川賢が第四八回創元会展に初入選。
- 一九九四年 利光敏郎が第七〇回記念白日会展に初入選。

開館20周年記念  
ふるさと  
大分の洋画家たち



2018年4月13日(金) ▶ 5月6日(日)

休 日 4月18日(月)、23日(月)、5月3日(木)  
会 場 大分市美術館企画展示室  
観覧時間 午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで)  
観 覧 料 一般800(600)円/高校生・大学生600(400)円/中学生以下は無料  
TEL: 097-554-5900  
FAX: 097-554-5811  
http://www.city.ofuoka.jp/museum/

大分市美術館  
MUSEUM OF OITA CITY  
OITA CITY MUSEUM  
〒870-0001 大分市本町1-1-1 TEL: 097-554-5900



大分市の洋画家たち、その歩みと軌跡をたどる。大分市美術館開館20周年を記念して、大分市美術館に所蔵されている洋画家たちの作品を展示する。大分市美術館に所蔵されている洋画家たちの作品を展示する。大分市美術館に所蔵されている洋画家たちの作品を展示する。

大分市美術館  
MUSEUM OF OITA CITY  
OITA CITY MUSEUM  
〒870-0001 大分市本町1-1-1 TEL: 097-554-5900